

## 言葉；・・・です

岡本祥一 予科5-7

(川口市) 航空16-4通信

ご記憶だろうか。昭和19年3月、将校生徒として朝霞に入校、最初の中隊長訓話である。多くの注意事項の中で、次の指示を忘れることが出来ない。

「・・・です」を使うな「・・・であります」と言え。

以来、今に至るも此の指示は頭にこびりついている。「・・・です」の言葉に雑な感じがあり、文章でも「・・・であります」と表現することになっている。

司馬遼太郎も「・・・です」の表現について関心を持っており、「本所・深川散歩」の文中で考察している。その一部を要約する。

「です」表現は江戸時代では遊里や芸人の言葉で、明治時代以降では書生言葉として多用されはじめたのであろうと論じている。

さらに、「です」の用語について、芥川龍之介が平安時代を舞台とした「藪の中」の会話を取り上げている。

話は一つの他殺体をめぐって、それを目撃したり、かかわったりした人たちの会話が出てくる。

例えば、死体を見つけた木樵りは検非違使の聴取に、死体があった場所について、「竹の中に瘦せ杉の交った人気のない場所でございます」といい、死骸の男にその前に出会ったと言う旅法師も、「ございます」と丁寧言葉を使っている。

ところが、下手人とされる盗賊多襄丸は「です」を使う。「あの男をころしたのは私です」。また「卑怯な隠し立てはしないつもりです」、「そうです。私は男を殺すつもりはなかったのです」。

ここでもう一人、死骸になった男の女房が登場する。夫を多襄丸に縛られ、その目の前で犯されるが、手ごめにされたあと、彼女自身が夫を刺し殺したという。とんでもない展開である。

その女のことはつかいは、多襄丸と同様「です」言葉である。

司馬は次のように解説する。

「ございます」よりも「です」の方が、簡略で断定的な響きも強いから、盗賊多襄丸のふてぶてしさをにおわせるのに都合がよい。女による「です」体の言葉は、自分の屈折した心理を自分で語るという、明治時代以降の言葉の類型に属する。女も多襄丸もその言葉使いから、近代人を代表しているといえなくもない。

「です」の言葉は、上品な表現ではないと司馬は主張したかったのではないか。司馬の文章には「です」を用いた文体は見つからない。